77

冬虫夏草（広義）渡来の歴史と薬物としての受容

奥沢康正
京都市

諸書の本草書に収載されている菌類であり昆虫病原菌でもある生薬名を出典の古い順にみると、ムシカビの白彊蚕（Beauveria Bassiana）、コルヂセプス属の蟬蕈（[蟬花・冠蟬] Cordyceps sobolifera）、次いで冬虫夏草（Cordyceps sinensis）の順となる。白彊蚕は養蚕の発達により自然発生頻度も高く生薬として供給に不足を生じなかった為、『医心方』をはじめ多くの本草書・医書に薬効記載を見、天平九年（七三七）の太政官官符に天然痘による皮膚瘢痕治療の記載までさかのぼることが出来る。また蟬花の文献史上での初出は李時珍『本草綱目』によれば『礼記』とするが演者は『図形本草』（一〇六一―一〇六二）以降とする。生薬として詳述される劉文泰撰『本草品彙精要』（一五〇五）、李時仲梓著『薬性解』（一六三〇頃）、和刻の松岡如庵著『用薬須知』（一七二一）など蟬蕈の薬効記載は白彊蚕に比べ少ない。なお、蟬蕈の薬効は蟬、蟬脱（蟬殻）と極めて類似しており、小野蘭山も『本草綱目啓蒙』（一八〇三）に蟬蕈の代替生薬として記述しており、これは蟬蕈の発生量による供給不足の為と考えられる。

次に演者は以前に冬虫夏草（Cordyceps sinensis）初出を呉儀洛撰『本草従新』（一七五七）としていたが、今回の調査により内閣文庫所蔵 汪昂著『本草備要』（一六八三）に記載を見ないが杏雨書屋所蔵『増訂本草備要』（一六九四）に冬虫夏草の記載を見、この書をもって初出として誤りを訂正したい。また冬虫夏草の渡来時期については青木昆陽著『続昆陽慢録・補』（一七六八）、広川獬著『長崎聞見録』（一八〇〇）のほか栗本瑞見『千蟲譜』（一八一一）には「享保一三年（一七二八）に寧波の船主伊心宣が長崎に船載し、これを幕府に献上した」との記載があり、一七二三年イエズス会宣教師ドミニク・パルナン（Dominique Parrenin）（一六五一―一七四一）が中国の冬虫夏草をフランス科

学アカデミーに送っており、チュンベリーが長崎出島に滞在中（一七七五―一七七六）、またシーボルトが一八二六年江戸参府途中冬虫夏草の乾燥標本を見ているなどの、諸資料により演者は一七二八年以降、冬虫夏草は長崎はじめ九州で入手可能であったと考えている。また藤井成斎著『手板発蒙』（一八一三）による江戸でかなりの数量が比較的安価に取引され、柚木常盤が住した滋賀県下迫村近辺から持ち込まれたと推察される近江産冬虫夏草（虫生菌の属種不明）の記載、さらに明治中期において九州八女産のカメムシタケ（Cordyceps nutans）が関東で市販されていた史実などが冬虫夏草属を生薬に利用していた裏づけとなる。もっとも蝉蕈、冬虫夏草など昆虫本草に位置する昆虫病原菌の薬物利用は我国に於いて広く利用されていなかった主たる理由は中国、日本における採集量の不足が大きく影響したのではないかと考えている。

最後に冬虫夏草の記述は本草書・医書のほか中国では袁棟著『書隠叢説』（一七六八以前）、唐秉鈞著『文房肆考』（一七七五）、椿園著『西域聞見録』（一七七七）、馬掲・盛繩祖著『衛蔵図識』（一七九二）、徐昆著『柳崖外編』（一七九三）など一七六〇年代から一七九〇年代にかけて、日本では橘南谿『東西遊記』（一七八五年度の記述）、広川獬（一八〇〇）、伴蒿蹊『閑田次筆』（一八〇六）、多紀元簡著『医賸・続編』（一八〇九）など一七六〇年代より一八一〇年代にかけて地誌、紀行、随筆等の諸書に珍奇な物として紹介されている。これ等の内容は幼虫から蛹、羽化、産卵という生命の再生、復帰という輪廻思想に重ね昆虫から草木、草木から昆虫へと全く異質な物に変化する〝物化〟の不思議さは西洋でも vegetable wasps and plant wormsと称されており、古今東西同じであることを示して入る。